

エッセイ

「自分らしさ」とは何か

複数言語環境で成長する子どもとの出会いを通して

北村 名美*

© 2023. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. このような活動を僕が外国人だからやるの？

ある日の日本語指導で、トウマ（仮名）は「You do this kind of activity because I'm a foreigner?」（筆者訳：先生はこのような活動を僕が外国人だからやるの？）と私に尋ねた。これは、幼少期より複数言語とともに成長してきた自分自身を考える活動を日本語指導の中に取り入れた時のトウマのことばだった。そして、日本語指導を担当¹し、ある程度信頼関係が構築されたときのことばだった。このことばを聞いた瞬間、トウマのことを十分理解していたようで、理解できていなかったのではないかと考えた。ここでトウマの説明を簡単に行う。トウマとは、サッカーが大好きで、将来プロサッカー選手になる夢を持つ中学3年生の男子生徒である。また、日本とアジア M 国にルーツを持つことや、来日直前まで父親の仕事の都合で、ヨーロッパ A 国で生活していた経験があるため、日本語、英語、アジア M 語、ヨーロッパ A 語と複数言語に触れながら幼少期を過ごしてきた。

「先生はこのような活動を僕が外国人だからやるの？」と発したことばの意味を考えてみた。授業の冒頭で、トウマ自身がどのように幼少期より複数言語とともにこれまで成長してきたの

* 早稲田大学大学院日本語教育研究科修了 (Eメール: nami_kitamura@fuji.waseda.jp)

1 筆者は、東京都内のある公立中学校で約半年間、日本語指導担当教員として、トウマの日本語教育に関わった。

かを振り返り、自分に自信を持つことを授業の目的としていることをトウマに伝えていたが、トウマにとってこのような授業をすることは「ただ自分が外国人だから行っている」と外国人扱いされたと感じたのである。その理由として、トウマは、ヨーロッパ A 国に住んでいた頃に、日本とアジア M 国のルーツや、日本人の名前、肌の色、言語能力などの理由から、他者より好奇心まなざしを向けられることが多々あったと私に語ったことがある。その語りから、トウマを理解しようとする際、外見や名前など目に見えるものに注目し、そこからトウマについて理解を深めていくのではなく、トウマだけが語ることのできる移動の経験や記憶、努力、挫折などより人間としての本質的な部分に注目してほしいというトウマの思いを筆者はしっかりと受け止め、考えていくべきだと学んだのである。

2. 自分は自分なんだ

「先生はこのような活動を僕が外国人だからやるの?」という発言があった日本語指導から2週間後のとある日本語指導のことである。

トウマが Black Lives Matter (BLM) に興味があることから、Black Lives Matter (BLM) について一緒に考えた。このような事例は米国だけでなく、あらゆる国(日本を含む)においても存在していることを対話した。そして、私が「Black Lives Matter (BLM) が今後起きないように、人権を守るためにはどうすればいいかな」とトウマに質問をした。そうすると、トウマは真っ先に「気にしないこと」と答えた。なぜこのように答えたのかその理由を私が尋ねたら、他者からのまなざしによる来日前と来日後の経験を話してくれた。「ヨーロッパ A 国に住んでいた時は、肌も黒いし、名前も一人だけ日本人の名前だから、道を歩いていたら、何度も見られることがあって、なんで何回も見てくるんだよ!と思うこともあった。でも日本人の名前を持つ人が一人もいなかったから、ちょっと特別な感じもした。今は、サッカー部のみんな日焼けしていて、肌が黒いから僕は目立たなくなったし、身長は、ヨーロッパ A 国の時はみんな大きくて、自分が小さく感じていたけど、今はみんなから羨ましがられる。でも、僕の苗字は日本の中だと普通だから、苗字はちょっと特別感がない感じがする。こんな経験から今は「自分は自分なんだ」と思うようにしよう!と思っている」と話した。

特に、最後の「自分は自分なんだ」ということばは、他者からのまなざしに苦しんだ日々もあったが、現在は、肌の色、身長、名前など目に見えるものによる他者からのまなざしを乗り

越え、大好きなサッカーにひたむきに取り組む自分自身を誇りに思い、夢に向かって突き進んでいこうというトウマの芯の強さが見られた瞬間だった。

3. 「自分らしさ」とは何か

私はトウマと出会い、日本語指導を通してトウマと信頼関係を築く過程で「自分らしさ」とは一体何か日々考えさせられた。私もトウマと同じように日本と韓国にルーツを持ち、「自分は一体何者なんだろう」と考えながら成長してきた。トウマと出会うまで、そして、大学院でトウマのような複数言語環境で成長する子どもについて深く研究するまで、日本人でも韓国人でもない私を既存の型にあてはめたり、既存のコミュニティに自分も所属し、居場所を作りたいと思ったりすることもあった。しかし、トウマのプロサッカー選手になるためにひたむきに努力する姿勢や、自分がルーツを持つ言語ができる・できないという点で自分の存在価値を決めるのではなく、自分のやりたいことや信じることを軸に「自分らしさ」を表現するトウマの姿勢が今の私に必要な力ではないだろうかと気づくことができた。

複数言語環境で成長する子どもたちの「自分らしさ」に関する重要な研究はたくさんあるが、トウマの語りから、たとえ見た目や名前という目に見えるものから他者のまなざしを向けられることがあったとしても、自分のやりたいことや夢に向かって専念する生き方、他者の目を気にせず「自分にはこれがある」という自信を持つことも自己形成するうえで非常に重要なのではないかと考えを深めることができた。

日本社会の一般的な見方に自分自身を合わせようとする、自分自身の良さや個性が見えなくなってしまうときがある。トウマとの対話を通して、「私」という人間を既存の型やコミュニティにあてはめるのではなく、自分だけの新しいコミュニティを作って生きていったらいいのではないかと考えが変容していった。現在では自分という唯一無二の存在を誇りに思い、今までのポジティブな経験もネガティブな経験もすべて、現在の「私」を作るうえで欠かせない運命的な経験だったと思っている。

文献

川上郁雄(編)(2010)『私も「移動する子ども」だった——異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー』くろしお出版。